冬頭王塚発掘調査報告

1971

高山市教育委員会

0074

序

国道41号線バイパスの予定路線が冬頭の王塚をつらぬいて通ることが発表されて以来、われわれは、数少い市内の古墳の中でも現在まで未発掘のまま、ほぼ完全な形で保護され、市民の崇敬もあついこの古墳を破壊せず残そうと努力してきた。しかし、バイパス工事は古墳にふれずして施行できないので、中部地方建設局高山国道工事事務所と協議のうえ工事に先立ち、厳冬期にむかって発掘調査を施行することになった。

発掘総括指導者に考古学者として、また、県文化財審議委員、市文化財審議委員として日頃活躍されている大野政雄氏を、主任調査員に日本考古学協会員紅村弘氏を委嘱し、その上別記の如き人々や、地元の多数の人々の協力を得て学術的成果をあげ、発掘調査を完了することができたことは大変よろこばしいことである。特に、道路建設による文化財の滅失という現代の災に対し、例年になく早い降雪の中で文化財の記録保存に熱意をもってあたられた諸氏、財的援助を賜った高山国道工事事務所には深く感謝の意を表する。

ここに貴重な資料をまとめて報告することになったが、これが今後研究の資にもなれば幸いである。

尚、本報告書は、大野政雄氏、紅村弘氏、増子康真氏、須田圭三氏、田口忠夫氏の労をわずらわしたものである。

昭和46年3月

高山市教育長　　畑　中　裕　作

例　　言

1　本書は、昭和45年11月から12月まで発掘を行なった高山市冬頭町所在王塚古墳の発掘調査報告である。

2　王塚古墳の発掘調査は、中部地方建設局高山国道工事事務所の委託をうけ、高山市教育委員会が実施した。

3　発掘調査にあたり、発掘調査委員会を組織し、同事務局を設置した。そのメンバーは下記のとおりである。

4　本編の執筆者名は、各項の末尾に付記した。

5　本編の挿図作図並びに図版の写真撮影は、主として紅村弘が担当した。

6　発掘調査に際しご協力をいただいた各位に対して、厚く感謝の意を表する。

王塚発掘調査委員会

総括指導者		大野政雄	
主任調査員		紅村　弘	
調査員		増子康真	
土地所有者	東等寺住職	竹田智了	
檀徒総代		加藤久一	副委員長
〃		中島喜代二	
冬頭町内会長		島田喜昭	
国道事務所	用地課長	加藤時茂	
〃	用地係長	山本雅己	
高山市バイパス事務局	局長	田中三郎	
〃	専門員	赤枝政吉	
高山市文化財審議会委員		三島常馨	副委員長
〃		小林　幹	
〃		八野忠次郎	
〃		荒川正平	
〃		白川賢二	
高山市教育委員会	教育長	畑中裕作	委員長
〃	社会教育課長	明野準一郎	

王塚発掘調査委員会事務局

事務局長　赤枝政吉
会　計　同上
庶　務　亀山喜一
〃　鋼島大衍

目　次

序

例言

I　地形および現状……1

II　調査経過……3

III　封土築成の観察……5

IV　石室と遺物出土状態……8

V　遺物……13

VI　結語……19

附編　I　王塚古墳の歯牙について……23

II　王塚古墳の骨に関する報告……25

挿 図 目 次

第1図　王塚古墳附近地形……1
第2図　王塚古墳実測図……2
第3図　封土盛土状態……6～7
第4図　石室断面・平面図……9
第5図　石室側壁・断面図……11
第6図　鹿角装剣・直刀……13
第7図　鉾・鹿角装具・素文鏡・玉類・鉄製金具……14
第8図　鉄鏃……16
附第1図　2号石室発見人骨（1）……26
附第2図　2号石室発見人骨（2）……27
附第3図　2号石室発見人骨（3）……29
附第4図　1号石室発見人骨……31
附第5図　1号石室発見骨片……33

図 版 目 次

図版第1　王塚古墳全景
図版第2　石室全景
図版第3　2号石室遺物出土状態
図版第4　1号石室遺物出土状態
図版第5　2号石室出土素文鏡・玉類
図版第6　2号石室出土剣細部・同鞘遺存部、1号石室出土鉄製金具
図版第7　直刀・剣・鉾
図版第8　鉄鏃
図版第9　歯牙・人骨

I　地形および現状

王塚古墳の所在する地点は、高山市冬頭町88番地に属し、標高は 555米弱の平らな地形のうちにある。この地点から東方は、約40米をへだてて国鉄高山線が南北方向に延びており、更に700米 にて宮川に達し、更に 800米余にて高山市松本町の山裾に至る。南方は長く4粁の平地がつづき、この間高山市街地がひろがっている。西方もまた川上川に沿って2粁以上も平地がつづき、高山市前原町にて山裾に到達し北方も2粁程で赤保木町の山裾に達している。

第1図　王塚古墳附近地形

しかし、南西側は、約60米をへだてて標高630米 の山岳の裾がせまっている。すなわち王塚古墳は、南北に長い高山市平地部のうち比較的北寄りの位置にあり、平地地形を基盤として築成された古墳である。古墳の調査当時における現状は、国鉄高山線に並行して、南北方向にのびる道路と本母町から上切町方面に至る道路との交叉点北東側にあたっており、墳丘に接して西側は、東等寺にはいる小径があり、更に西側と北側、南側の周辺は水田となっている。東側のみは、10米程の島畑状の畑地があり、一段低まって水田となっている。

墳丘は、高さ約5米、径20米程度の規模をもっており、墳頂部20平方米程がやゝ平らな感じである。墳丘全体は、松、桜、椿等いずれも樹齢20年から50年程の径20～30糎の樹木によっておおわれていた。そして南側は昭和4年に造築されたという岩石による庭園風の構造があり、その上方部には石造りの太子像が安置されていたのである。そして下方に墳丘盛土より下の平地部に空池が掘られており、その周辺は、一抱程の大きさの岩石で囲われていた。この庭園および池に用いられた岩石は、昭和4年聖徳太子像を安置するおりに搬入されたものであり、古墳とは無関係のものである。

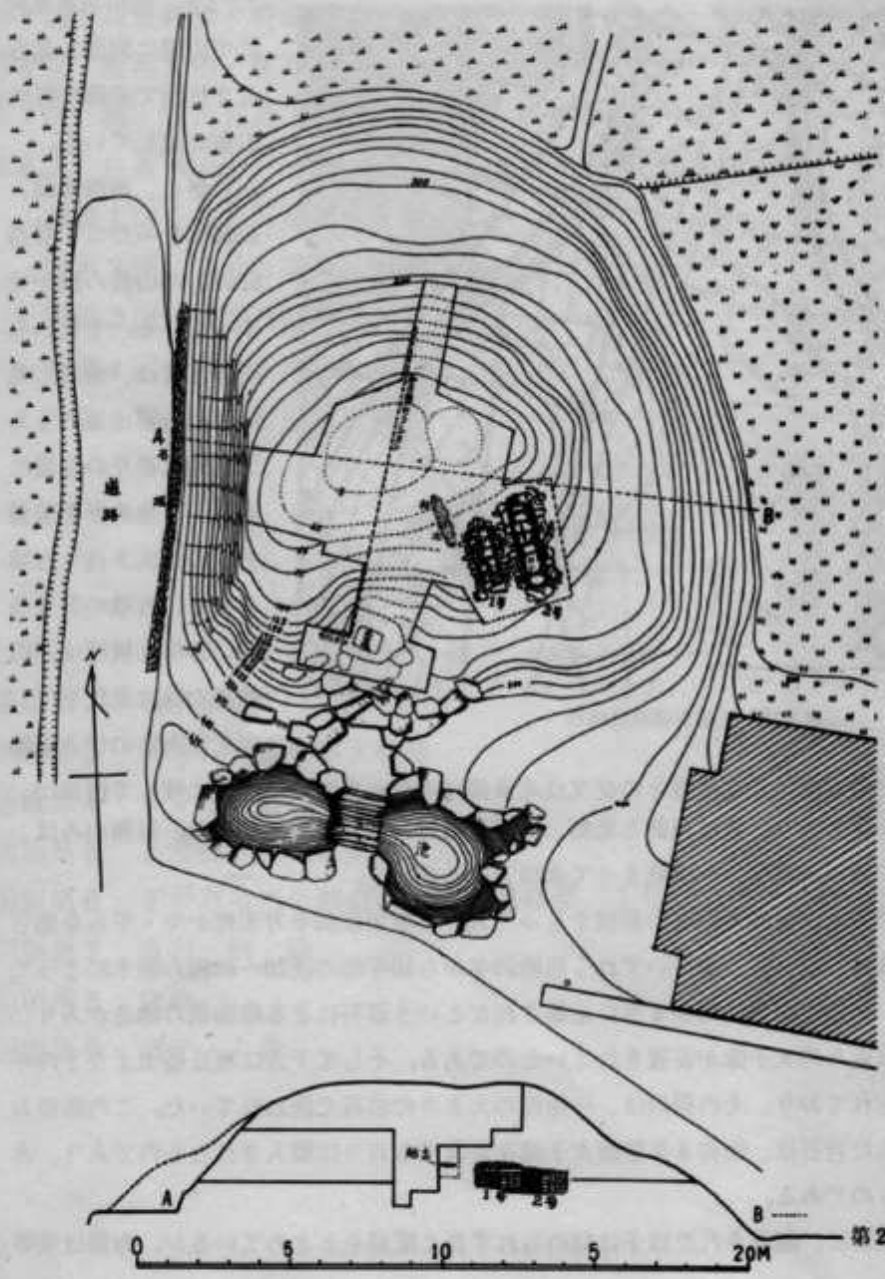
墳丘の北側と東側は、削除された様子は認められず良く原形をとどめているが、西側は東等

寺に至る道路のため削除されて崖状をなしている。

この北と東側の墳丘斜面には中位に平坦部がめぐっており、いわゆる二段築成と観察される。この段部は墳丘東南側に約 2.5米の張出しが認められ、後記のように、その部分の奥に石室が埋設されていたわけであったのである。

かように、本古墳は平地地形の水田中に立地し、高さ約5米径20米の二段築成の円墳と云う一般的な観察を得られるものであり、外見的にも盗掘等の痕跡は認められなかった。

（紅村　弘）



第2図　王塚古墳実測図

II　調査経過

王塚古墳は、昭和45年11月10日より調査を開始した。まず大野、紅村が古墳周辺の地形と田畑の地表観察をなし、ついで同日午前より墳形の測量を進めた。測量は、市関係者と紅村が主として行ない、11月13日に完了した。

発掘は11月21日に開始した。まず墳頂にほぼ東西方向にて巾80糎長さ6米のAトレンチを設定した。このトレンチを同日深さ約 1.8米まで深めるが出土品は全く認められない。次に墳丘頂の南寄りにAより4米はなれて太子像の北側にあたる部分に東西方向のBトレンチを巾80糎長さ5米にて設けた。地表下60糎から須恵器一片出土、更に深さ70糎から細い碧玉管玉の小破片を見出した。次いで22日と23日の両日に亘りAトレンチとBトレンチの中間位置を全面的に掘り拡げ、深さも1米以下にまでおよんだ。しかし遺構や遺物の出土は全く認められなかった。

ついで24日から26日の間においては、墳頂のAトレンチ北側部の発掘を進め、深さも 1.5米以上におよび、封土築成等の資料を得たが、やはり埋葬施設や出土品を見出すことができなかった。27日は墳丘の南側をトレンチ状に掘りその南を部分的に深く墳頂より約5米を計る部分まで掘り下げた。また墳丘の北側にも南北方向にトレンチを設定し、これ等を連繋することによって墳丘の南北セクションの大要を把握することができた。更にAトレンチ東と西部も拡張発掘する。次に28日となり前記の南北連絡トレンチのほぼ中央部において深さ約 2.5米より、黄色粘土が平らに敷かれた状態で出土したため、この部分の掘り下げ、29日に至ってようやくそれが南東方向から北西方向にほぼ水平に拡がる巾30糎、厚さ2糎の帯状をなすことを確かめた。しかし出土品はなく、調査のこの段階ではその粘土の性格も把握できなかった。

ついで30日には拡張した各トレンチを平板にて測量し、更に各セクションを検討した。そしてこの段階において、本発掘の諸データーを検討した結果、それまでのトレンチはプランでは墳丘上段の60%に達する面積を持ち、また深さでは中心部で 2.7米におよんでいることを知った。しかしにもかかわらず古墳埋葬主体に達しない点を考慮して、主体部の追及を断念することとなった。この場合、私は墳丘上方の浅い位置に木棺直葬等の比較的残存構造にとぼしい施設が存在し、それが封土の流出とともに破壊しつくされたと云う一応の想定をなしたわけであった。

さて上記の事情にもとづいて、発掘の遂行は中止したが、なお封土盛土はかなりの部分が遺存しているわけであり、調査完了とすれば明春における道路工事の進行によってこれが削除されることは明白である。古墳一般の常識に反して中心をはずれた未発掘部になんらかの遺構が埋葬されていた場合も考えられるので、ここに工事に先立って残余の封土を掘削し、万一の場合に備える必要が生じたわけである。

この点について市と地元当局によって計画が立てられ、12月1日より残存部をブルトーザーにより機械的に削除する作業を開始した。同日午前中は封土西半を削除し、午後1時頃に至り

中央を南北方向に切断したトレンチの下底部も削り取った。この段階までは封土中より何らの出土品も見出し得なかった。

しかし、削除がこのトレンチ部よりも東に及んで進行しはじめて間もなく、ブルトーザーが何か堅固なものに遭遇し、大きな音を発したのである。早速私共がこれを検討すると、大型円礫を積上げた石室の外部である事が認められたため、これより早急に調査方針をあらためることが必要となった。

12月2日となり、降雪をみるなかで石室上部の盛土の削除を進め、3日に至り約2.5米の盛土を排除して石室上面に到達し、二基の竪穴式石室がほぼ南北方向に長軸をおき、並存している事を確認した。ここで先にブルトーザー削除にて露出した西側例を1号石室とし、東側例を2号石室とよぶこととした。

12月4日にはまず1号石室の蓋石配列を実測し、これを取上げ石室内部を検討し、鉄鏃、直刀、骨片等の存在を確認したのである。1号石室内部にはほとんど土壌の流入はなく、若干の清掃をなした後、遺物配置状態の撮影と実測をなした。次いで同日2号石室の蓋石の一部も取りはずしたが、これには土壌の流入が著しくその排除に時間をついやし、同日は夜間にまで作業がおよんだ。そして素文鏡が見出された。

5日となり、2号石室は蓋石を全部取去り、石室内の排土を進め小玉・丸玉・骨片・鉄鏃等を見出した。また午後となり石室北側部より大腿骨・歯等の配列が明らかとなった。そして同日夕刻から夜に到るまで作業を継続し、これ等の配置図、写真等の記録をなし、同夜ほぼこれを終了し、取上げ作業も行なった。ついで12月7日より13日までの間に両石室の実測をなした。

（紅村　弘）

III　封土築成の観察

次に封土の築成について観よう。この王塚古墳の墳丘は、西側の道路面から約 4.5米弱、東側の一段低い畑地からは約5米の高さをもっている。墳頂部は前記のようにやや平らな感じをもち西と南側は後世における変形をうけている。

経過の項において述べたように、頂部の平らな部分より発掘を開始したわけであるが、まず最上部には厚さ50～80糎の円礫を混じ、灰褐色味をおびた黒色土層が堆積していた。この層中からは遺物の出土は全く認められなかった。混礫土層は以後下位より出現した黒色や黄色の土層に比較すると同一層内の細層の区別もなく、礫や土が乱堆積した状態を示しており、異質で不安定な感じのする層であった。或いは墳丘築成後に時をへだてて再盛土されたもののごとく観察される点もあったが、その明確な証拠を摑むことはできなかった。

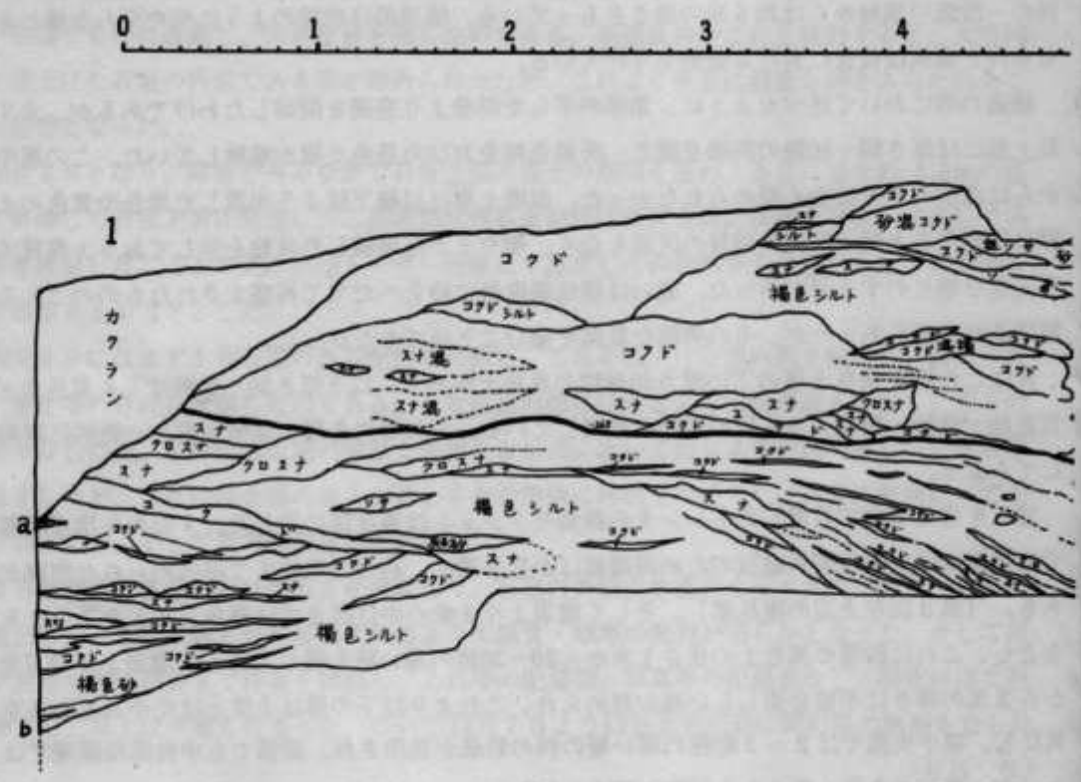
次にこの礫混褐色土層の下に厚さ30糎程の黒色土があり、以下厚さ30～2糎に至る黒色土・黄色砂・粗砂・褐色シルト等の互層が堆積している。これ等の各層の堆積状態を一般的に説明してみよう。

墳丘を南北方向で設置したトレンチの西側セクションは第3図に示した。すなわち墳丘南部では聖徳太子立像台座の建設のため西端部はかなり深く、約 2.5米程まで掘凹められた形跡がある。（第3図左上辺の攪乱部）。そして墳頂より3米の中位部までは褐色シルトと黒色土を主とし、これに砂層や黒色土の長さ1米から20～30糎の薄い層を混じている。墳頂より 2.7米から3米の深さに不整合面らしい線が認められ、これより以下の層は上位とはややおもむきを異にし、墳中央部では2～3糎程の薄い層の斜の形成が見出され、南部でも中央部程顕著ではないが、層がやや薄く広くなる傾向が認められた。

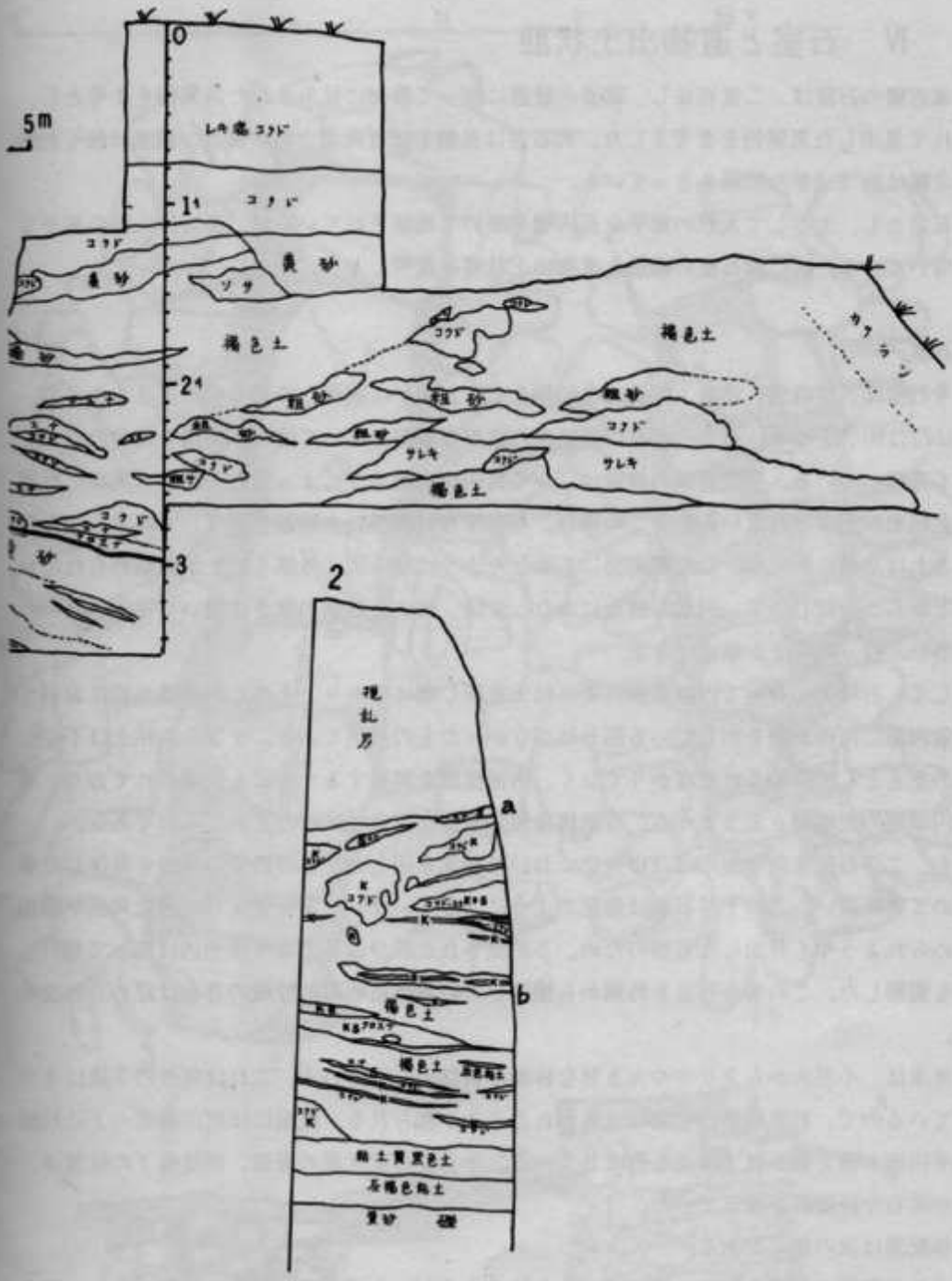
また墳丘南側に墳頂より算して5米の深さまで掘り凹めた部分においては、上位は太子像台座基礎のため攪乱されているが、下位の約2米の厚さではやはり砂・黒色土・灰色粘土・褐色土等の互層が認められた。そして墳頂より算して、深さ 4.9米の位置においてより上位の薄層の堆積とは異なった粘土質黒色土・灰褐色粘土・黄砂と礫の層の水平な堆積を見出し、この灰褐色粘土の上面が本古墳形成前の地表であることを認めることができた。

このように現地形でも墳高は約5米であるが、これと墳丘形成当時とも地表は大差なかったことを確かめ得たのである。

（紅村　弘）



第3図　封土盛土状態　1 南北セクション　2 太子像西位置におけるセクション


5m
0
1
2
3
コナド
黄砂
褐色土
粗砂
サレキ
カクラン
2
a
b
褐色土
粘土黄褐色土
暗褐色粘土
黄砂 礫

Ⅳ　石室と遺物出土状態

王塚古墳の石室は、二室存在し、調査の経過に従って最初に見出された西側例を1号とし、おくれて見出した東側例を2号とした。両石室は長軸をほぼ南北方向に置き、南部は狭く約90糎、北部は約 1.2米の間隔をとっている。

両石室とも、主として大形の扁平な長円礫を用いて構築されているが、蓋石は大形の扁平な石を用いている。次に両石室の構造と遺物出土状態を説明しょう。

1号石室

1号石室は、室内長1.95米、同最大巾63糎をなすわずかに胴張りの長方形のプランをもち、深さはほぼ60糎をなす。石室の蓋石は流紋岩の扁平な割石を用いて掩い、間隙を黄色の粘土を用いて充塡している。石室自体の構造は、全て長円礫の積上げによっており、その間隙には厚く黄色粘土が充塡されているが、この場合、石室保存計画のため積石を解体して築造方法を確めることは出来なかった。ただ実測図にも示したように礫の間には厚く粘土が敷詰められていることから、転位しやすい円礫を積むにあたっては、粘土を数糎の厚さに敷いて安定を計りつつ構築して行ったことが推定できる。

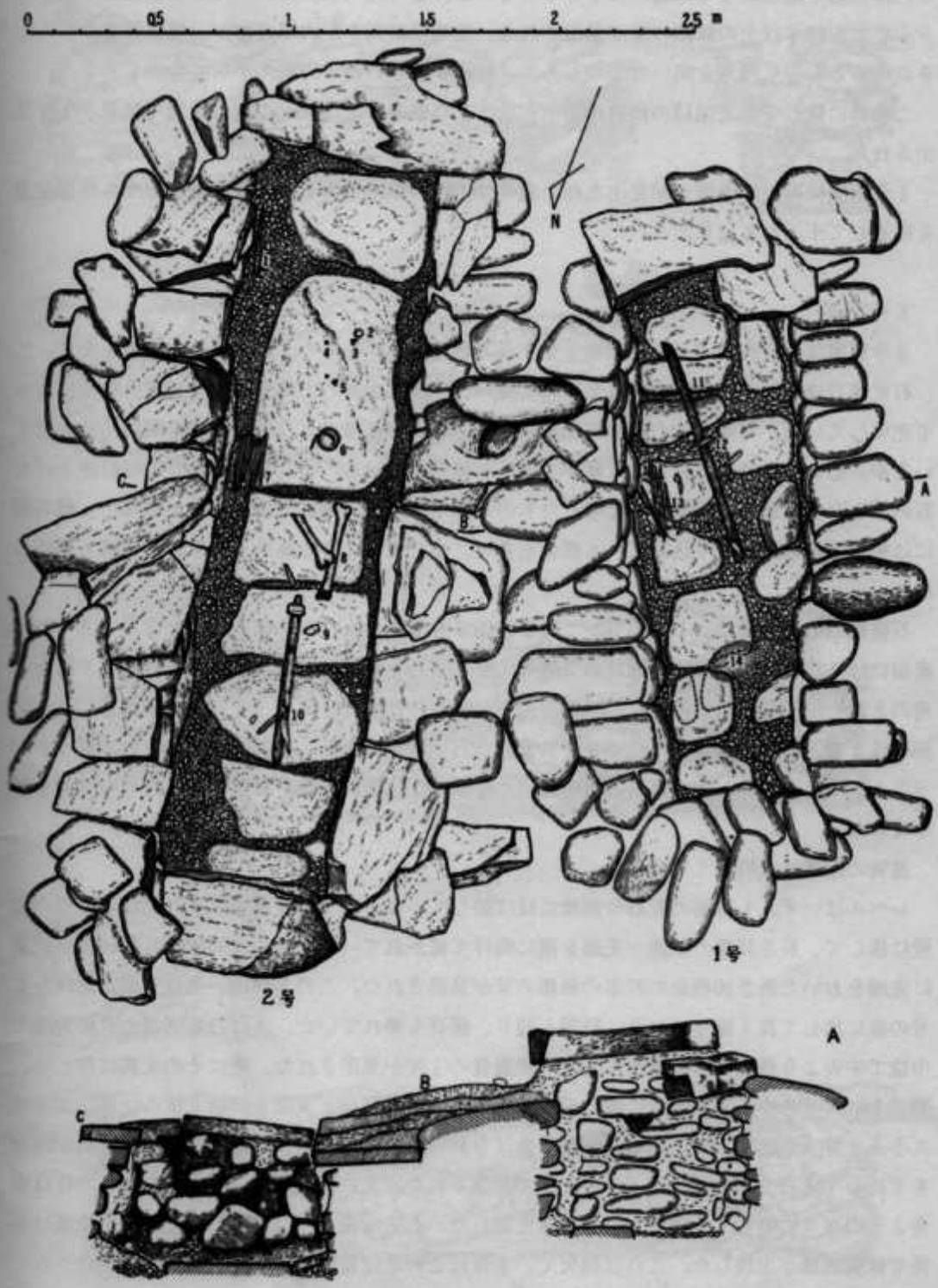
そして、石積後において内側壁面に更に粘土を圧し着けており、そのため構築当初においては石室内面に円礫が顔を出している部分は少なかったものの様である。すなわち粘土は不安な円礫の支えとして使用されたばかりでなく、内面壁面を調整するためにも使用されており、単なる円礫間の充塡材と云うよりも、石室構造材の重要な要素であったと言えるのである。

なお、この石室東側壁面のほぼ中央位において粘土を圧した左手の凹型の残影を見出した事は極めて興味深い。この1号石室は前記のようにブルトーザーによって圧して西北角部が露出せしめられようやく見出したもののため、この圧された部分は外方よりやや内に向って崩れ、石積も変形した。この場合石室を外側から補強している裏込め石の控積の存在は認められなかった。

石室床は、小豆大からよりやや大き目な砂礫が敷詰められている。これは側壁の下底にまで伸びているので、石室構築に先立って敷かれたことが知られる。底面には更に砂礫の上に13個の扁平円礫が据え置かれて床面を形成している。そして石室床面の周辺、側壁直下の位置は、粘土が床石や砂礫群を覆っていた。

遺物配置は次の如くである。

いずれも床面の細礫や配石に接しているわけであるが、まず石室北壁より30糎はなれ、南北壁の中央位において転落石と推定される扁平円礫があり、その下より骨粉状に微細化した頭骨片が現われた。そのうちには赤色材の附着した骨片が認められ、更に歯の存在も判明したのでこれは一括して採集した。次に南壁より80糎程はなれた部分に、鉄製直刀の柄端が見出された。



第4図　石室断面・平面図　1 鉄鉾　2 頭骨片　3 管玉　4 5 丸玉・管玉　6 鏡
7 鉄鏃　8 大腿骨　9 10 鹿角装　11 直刀 12 獣骨片
13 鉄鏃および不明具　14 頭骨片

これは先端を南東にして85糎の長さをもっている。この刀の東側において、東側側壁に接して少なくとも10本以上の鉄鏃の束が見出された。先端は南向きが大部分だが、現位置をややみだされているらしく西方を向いたものもあり、腐蝕が著しいので方向の不明のものもある。

この鏃に接して第7図13の鉄具が出土した。また直刀の上に載せられた状態で獣骨が1片見出された。

1号石室において発掘当初見出された遺物は上述の如くであるが、後に細礫のうち頭部位置を精査して小玉が2個見出された。

2号石室

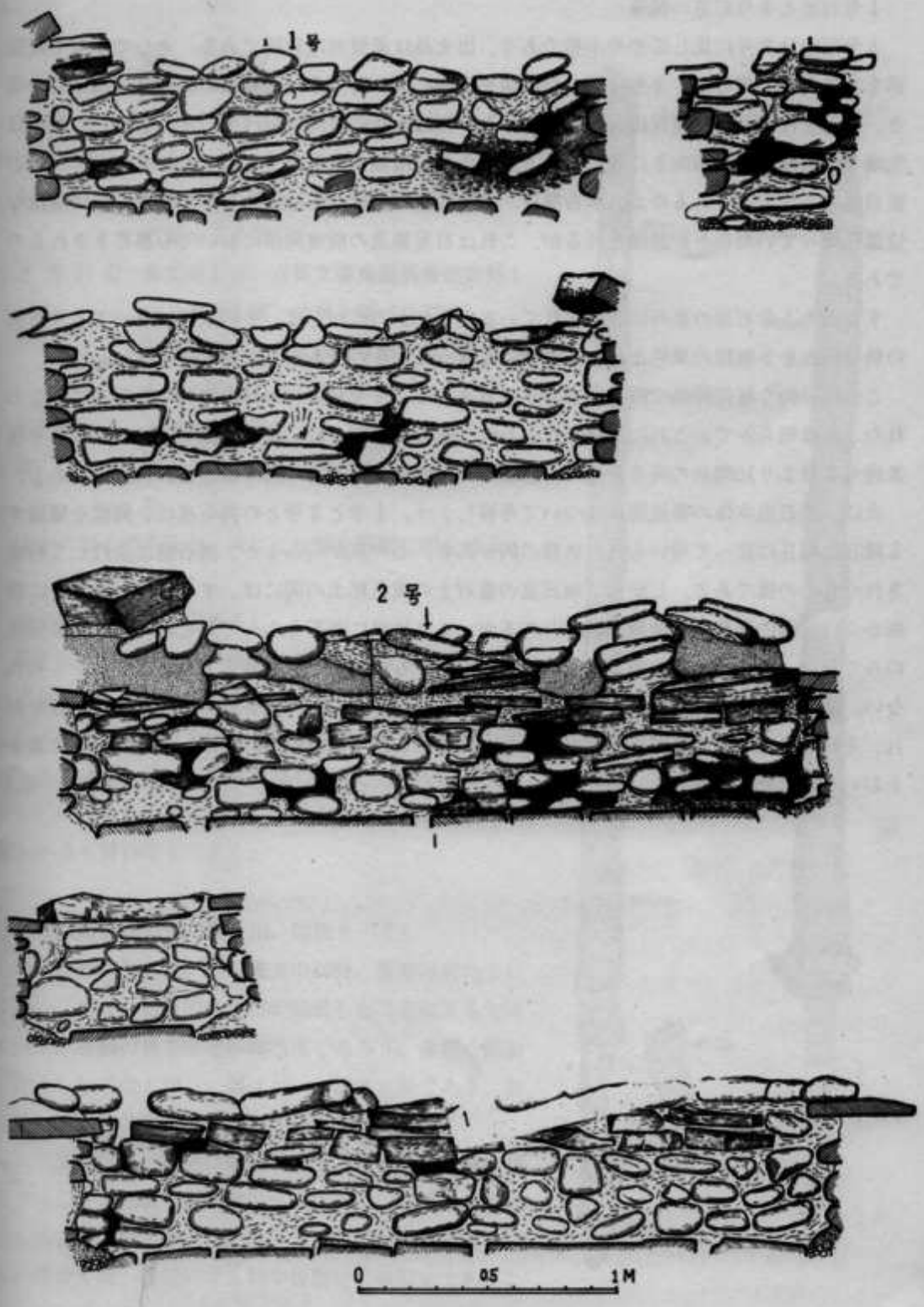
2号石室は、室内長 2.8米巾68糎をなす長方形のプランをもち、深さはほぼ60糎をなす。

石室蓋石は流紋岩の扁平な割石を用いて掩い、間隙を少数の土師器片を含む黄色粘土によって充塡している。石室自体の構築についてみると、先の1号のように長円礫を用いて積上げているが、しかし上位部においては扁平な割石を混用している。また本来は1号同様に積上げた石の間を全て黄色粘土によって充塡したものの様であるが、現在ではそれらが剝落し、積石間には樹根や黒色土が入り込んでいる部分も多い。また土竜による攪乱と推される痕跡も認められた。

石室構造においては、1号の方がこの2号よりも当初のかたちを保っていたようであった。底面には1号と同様、細礫を敷詰め7個の大型の平石を敷いている。この平石は割石ではなく角のとれた扁平な自然石であり、割石を用いた蓋石の性格とは異なっている点を注意したい。細礫は1号と同様、側壁の下側にまでおよび、石室構築に先立って敷き広げられた事をうかがうことができる。そしてやはり床面の周辺の側壁直下位置は粘土が堆積し、床石や細礫群を覆っていた。

遺物の配置は次の如くである。

レベルはいずれも床面の配石や細礫にほぼ接している。まず石室南東隅より25糎北位置の側壁に接して、長さ25糎の鉄鉾が先端を南に向けて置かれていた。次にこの鉾より約60糎北位置に先端をおいた長さ20糎余の27本の鉄鏃の束が見出された。この1群は、先端を南に向け、1号の鏃に比して良く揃っており、柄部も残り、保存も勝れていた。次に石室南端より60糎北で巾位で中央より西寄りの位置から人骨の頭蓋骨の1片が見出された。更にその北側に接して、管玉1、ガラス小玉1が床石に接し出土し、これより10糎ほど東位と15糎北位の位置にてガラス小玉と管玉が出土、更に南端より1米余はなれ、巾位はほぼ中央において素文鏡1面が鏡面を下にして床石より 1.5糎ほど浮き上って見出された。次に南端より 1.3米はなれ、巾位は中央より西寄りに偏して人骨の大腿骨2本が現れた。石室南端より 1.6米弱はなれ、巾位置は中央で鉄鏃柄部が出現した。これは残欠で、本体はこの北位置にあり、身部の長さ60糎余をなし直弧文鹿角装具が把元に装着されている。この鏃身より西側に数糎はなれて鞘口が出現した。また鏃身部には、木質の鞘部が附着して遺存している。



第5図　石室側壁・断面図

1号石室と2号石室の関係

1号石室は2号に比してやや小型であり、出土品は量質共に貧弱である。そして1号では頭部を北に向けて葬られ、2号は明らかに頭を南向に置いている。副葬品の配列は、剣と刀の場合、柄はそれぞれほぼ腰部に近い位置にあり、先端を足の方向に向けている。しかし、鉄鏃は先端を両石室ともに南向きに置いている。出土品の種類や量質いずれも2号石室がすぐれ、石室自体もより大型であるゆえ、本古墳は、2号石室の葬者が1号に比して生前はるかに優位な位置を持っていたことが想像されるが、これは石室築造の前後関係においても裏書きされるのである。

すなわち1号石室の蓋石に詰められている黄色粘土の広がりは、その東側において2号石室の被覆粘土を5糎程の黒色土層を1枚置いて覆っているのである。（第4図セクション）

この部分的な層位関係で確実に証明されるように、2号石室における埋葬が先行して行なわれたことは明らかで、これに埋葬が行なわれ、蓋石が並列され、黄色粘土で完封されてより後、基底も2号より10糎余の高さを保って設置された処の1号石室の埋葬が行なわれたのである。

次に、両石室本体の築造関係について考察しょう。1号と2号との両石室は、側壁を構造する積石に相互に亘って用いられた状態の例がある。この点からみると、両石室は並行して形成されたものの様である。しかし、両石室の蓋石上の黄色粘土の間には、すでに述べたように数糎から10糎程の黒色土の堆積が認められるが、これは単に蓋石をもって封じた時点の前後関係のみでなく、その造築時の或る程度の時間差を示すものと言う風の考え方も成立するかも知れない。従って両石室の築成が或る程度の時間差を持ち、1号が形成されてこれに埋葬が行なわれ、それより後に別に2号石室が形成されたのであるかも知れない。しかし筆者は前者に重きをおいて考えたい。

（紅村　弘）

V 遺　物

冬頭王塚古墳より、今回の調査によって見出された遺物は次の通りである。

1 号石室　直刀1口、鉄鏃1群、鉄製金具1個、石製小玉2個

2 号石室　素文鏡1面、直弧文鹿角装具着装鉄鏃1口、鉄鉾1個、鉄鏃1群（約27本）、管玉2個、ガラス丸玉3個、ガラス小玉1個、瑪瑙丸玉1個

石室外粘土　土師器細片若干

封　　土　管玉1個、土師器細片若干、須恵器片1片

以上の如くであるが、次にこれ等を個別に紹介する。

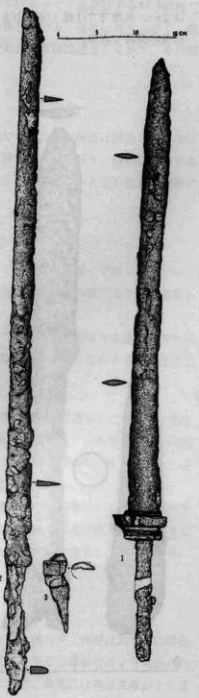
素文鏡（第7図、図版5）

面径68粍から71粍で、厚さは約3粍となす。鏡面が、わずかにふくらみ気味で凸面鏡。背面は磨滅した感じをもち文様は認められない。鏡縁は磨滅し、その断面は尖った状態になっている。一部銷の剝落した部分は灰色をなし、いわゆる白銅質を示している。紐は長さ1糎巾5粍と小さく薄い作りである。

直弧文鹿角装鉄鏃（第6図、図版6・7）

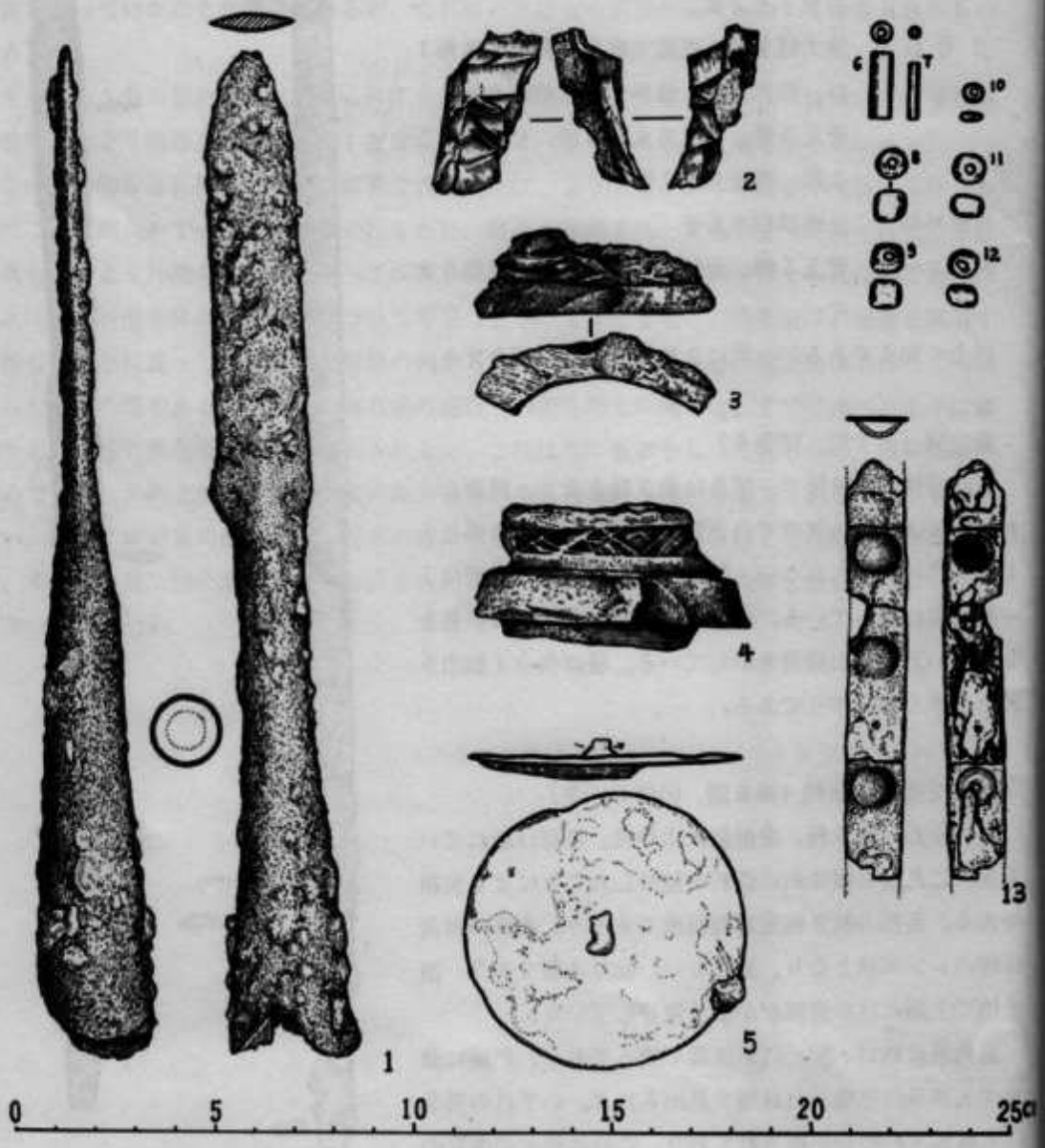
身の全長58糎5粍、身部最大巾40粍、茎部は折れているが、これは発掘直前に盗石が陥没したことによる欠損である。茎部の長さ推定16糎程度であろう。身部の断面は両凸レンズ状となり、鎬はない。鞘は木製であり、出土位で上面には木質部がかなり遺存していた。

鹿角装は鞘口・把元に原位置で残っており、把頭に該当する部分は遊離した状態で見出された。いずれの部分にも直弧文の彫刻が施されており、これは把元の保存の良い部分では、典型的なX軸半截型定型直弧文であることを示している。



第6図　1　2号石室出土鹿角装鏃
　　2　1号石室出土直刀
　　3　同装具

寡聞にして同一モチーフ例を見出し得なかったが、斉藤、宇佐両氏の研究[注1]を参考にするとC形に近く、その流れにおいて5世紀後半に位置すると思われ、少くとも6世紀にまで下ることはない。当地方では越・宝石山より遅れ、三河青塚に先行する位置が与えられよう。岐阜県下初見の資料である。



第7図　王塚古墳1号・2号石室出土遺物

直刀（第6図、図版7）

身長80糎5粍、身巾31粍前後のひらづくりである。関より把頭まで一部折損するが 165粍であり、中程に小さな目釘が1箇所に認められ、竹釘？が遺存している。全体に反りはなく、切先はややふくらみを持っている。鞘と把は木製らしく、把元の木質部は遺存しており、その部分を巾18粍の鉄帯で絞めている。

鉾（第7図1、図版7）

全長25糎6粍、身の長さ 115粍をなし、袋部の径は34粍である。身の断面は両凸レンズ状になっているが、明らかな鎬は認められない。柄の袋部は木質が遺存しており、鉾の位置からみて、石室いっぱいに木柄がのびていたとしても 230糎を越えることはないと思われる。袋部の一面には下から先端方向にのびるひび割れが認められる。

鉄鏃（第8図、図版8）

1号石室例　この石室から出土したものは保存状態が悪く、出土も不揃いであった。欠損したものが多いので明確ではないが、約10隻と推定される。全て長頸式尖根鏃であり、平根鏃を含まない。

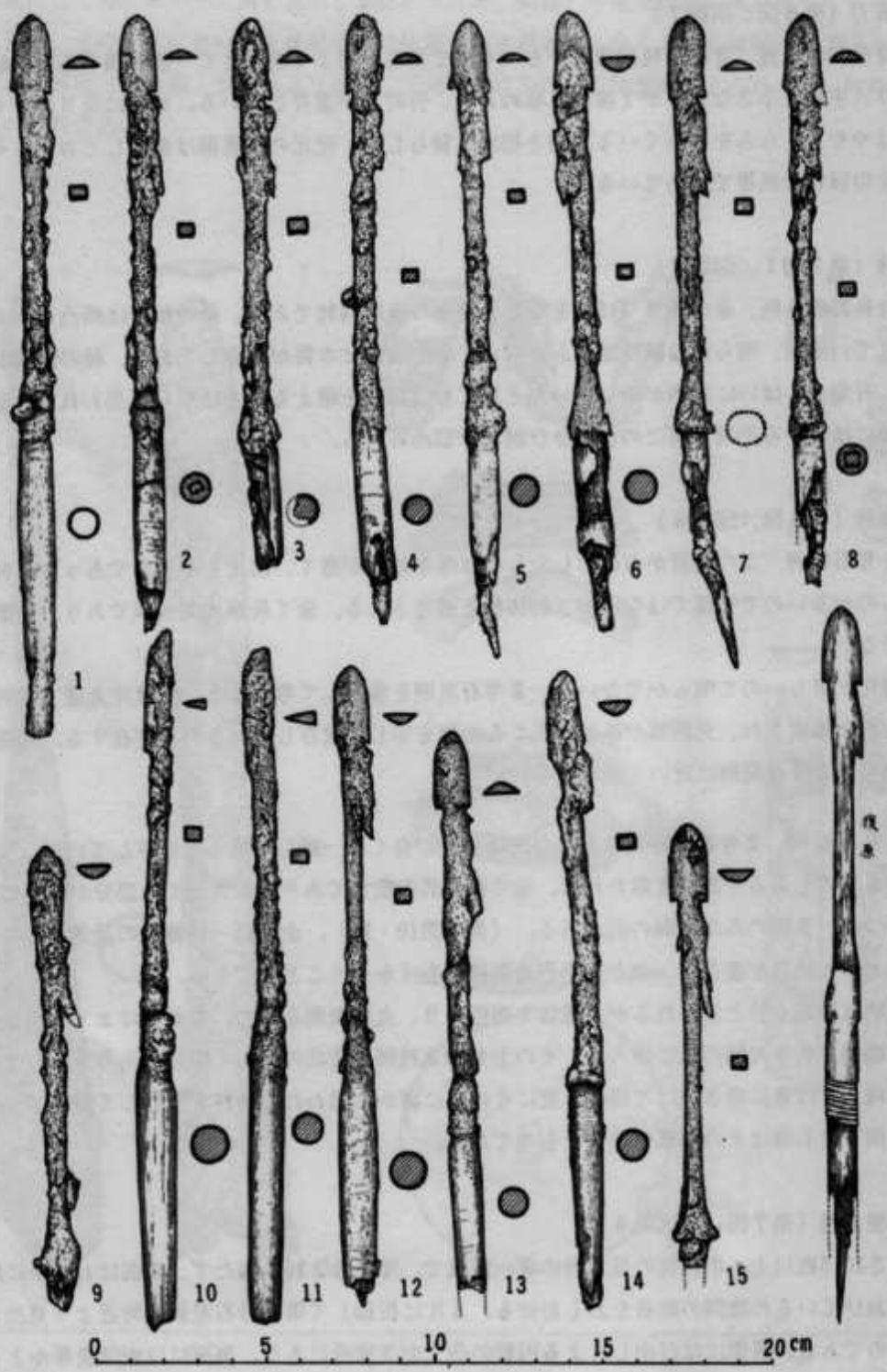
銹化が著しいので明らかでないが、2号石室例を参照して考えると、先は片丸造で逆刺を持つものと推定され、矢柄部が断面を丸くもつ形を示して遺存している例も存在する。構造等については2号石室例に近いと思われる。

2号石室例　2号石室から出土した例は保存が良く、一括して揃って遺存していた。欠損しているものもあるが27隻と思われる。全て長頸式尖根鏃であり、片丸造で大部分が両側に逆刺を持つが、2例のみ片逆刺の例がある。（第8図10・11）。全長15―19糎程の長さをもち、ほとんどが矢柄部を遺存し、鏃と矢柄の着装構造をうかがうことができる。

矢柄は恐らく竹と思われるが、径は1糎程あり、丸い断面をもつ。着装にはまず尖根部にX状に繊維を巻き矢柄の孔に挿入し、その上を巾2粍弱の帯状の恐らく樹皮であろうが、そうした素材を千段巻に巻き上げて固め、更にその上に漆かと思われる塗料を塗布して整えている。第8図下段右端はその復原を示したものである。

鉄製金具（第7図13、図版6）

長さ10.5糎以上、巾14粍の長方形の薄い鉄板で、厚さは2粍に満たず、表面はわずかに緑色味をおびているのは銅の附着をおもわせる。5片に折損して第1号石室鉄鏃附近より見出されたものである。表面には打出しによる円形の凸文が3箇所にあり、裏面には或は皮革かとも見られる銹化した附着物が認められる。用途は不明であるが、何らかの附属金具と推定される。



第8図　王塚古墳2号石室出土鉄鏃

玉（第7図6－12、図版5）

2号石室からは7個の玉類が出土した。1号石室からは、発掘後に採集してきた頭部位置の土砂のうちから2個の小玉破片を見出した。

2号石室例　遺体の頭部位置と推定されるあたりに、2例の灰緑色碧玉製管玉（7図6・7）2個と青色ガラス小玉1、濃紺色ガラス2例と赤色をなし瑪瑙と思われる1例の丸玉が存在する。

管玉　長さ 1.7糎太さ5粍弱の一例と、長さ 1.5糎太さ2粍と言う細い一例である。ともに完形であり、前記のように灰緑色をなす碧玉で作られている。穿孔は明確ではないが両穿のようであり、孔は垂直に近い角度で穿たれている。細手の方は極めて繊細な感じのするもので色も白味が強い。

小玉　（第7図10、図版5下）　径5粍厚さ2粍の大きさで、小玉としては大ぶりと言えよう。厚味はややいびつながら扁平な丸味をもっている。コバルト色のガラスを材としており、他に同質の微細な破片が2個ある。

丸玉　（第7図8・9・11・12、図版5下）　径7粍厚さ5粍強の第7図12例から同図径8粍厚さ5粍の例まで4例見出された。うち9は淡赤色をなす瑪瑙製であり、厚さ8粍径8粍と、同図8例とともに厚手で塊状をなしている。8・11・12の3例はいずれもが紺色に近い深い青色をなすガラス製である。この他に同質の繊細なガラス玉破片が1片見出された。

以上が、2号石室出土の玉である。

1号石室例　発掘中に見出し得なかったが、出土品整理中に頭骨細片を混ずる土砂を検討中に、このうちから2個の石製小玉を見出した。灰白色で白形をなすが、石製模造品ではなく、質素ながらやはり装飾品の用途をもったものと推定される。

封土中出土管玉　すでに発掘初日の11月21日Bトレンチの地表下70糎から管玉の出土したことは、調査経過の項において記述した。これは管玉の半分が欠失したもので、割れ口は新しいので発掘時に半截したとおもわれる。径5粍程の細い管玉で、白緑色の碧玉によって製作されている。主体の石室とは別に、封土上方における木棺直葬が行なわれ、その副葬品ではあるまいかと推定したい。

土師器

墳頂部の封土中から数片、2号石室を封じた黄色粘土中から数片と、いずれも器形を明らかにできない細片だが、土師器破片を見出した。茶褐色をなし、弱い焼成によっており、ぼろぼろとした粗雑な破片である。

須恵器

前記Bトレンチにおいて、封土中から出土した管玉に近く、よりやや浅い地表下40糎から須恵器1片が出土した。壺の口頸部と推定される。開いた円筒形で、古式須恵器の高杯脚部であるかも知れない。全体にやや磨滅している。この須恵器を本古墳と関連づけて考えることは、むずかしいかも知れない。中部地方最古の古墳出土須恵器は、愛知県春日井郡白山藪古墳例であろう。粘土槨下礫の排水施設中より、甕あるいは大型壺と推される破片が見出されている。それゆえに、冬頭王塚古墳に須恵器が存在しても矛盾はないが、本古墳の周辺に同期の遺物は認められない。或は先の土師器とともに供儀に際して用いられたものかも知れない。

（増子康真）

注

1　斉藤和夫・宇佐晋一「直弧文の研究」2　古代学研究11号、昭和30年

2　白山藪古墳は、南山大学によって発掘されたが、正式な報告がないため、観測を混じえた不正確な紹介しかない。発掘に参加され、実測を担当した紅村弘氏の御示教によれば、本古墳は斉藤忠氏（古墳の研究）、内藤晃氏（日本の考古学Ⅳ）の述べる如く円墳ではなく前方後円墳であるらしいと言う。道路の切通しによって隔てられた反対側に低いマウンドが認められ、昭和33年に筆者自身も円筒ハニワ片を採集して、前方後円墳であることを確認している。

出土遺物中の碧玉製管玉といわれるものは、紅村氏の確認されたところいわゆる鉄芯の玉杖（大和茶臼山古墳に類例あり）である。須恵器の存在等重要な内容を含む本古墳の報告が待たれる。

Ⅵ 結　　語

A 王塚の築造時代

冬頭の王塚は、2段築成の円墳であった。墳丘のすそは、西側で道路を通すため切断され、東側でも土採りのため一部を削り取られ、南側では太子像の建立と築庭工事のために破壊されていたが、王塚はなお、東西径約20m、高さ約5mの規模を残していた。

南東部の深い位置に河原石積みのあまり大きくない竪穴式石室が、主軸を南東方に向けて二つ並んでいた。東側の2号石室のほうが西側の1号石室より先に封じられたことがそれぞれの目張りに用いられたかま土（黄色粘土）の重なりぐあいから判明したが、その前後が両石室の時代差にかかわるものといいきれる状態ではなかった。

大阪府の土保山古墳[注1]は、直弧文把頭（木製？原体が腐食して、上に塗った漆の被膜だけが残っていた）その他の遺物を出土し、5世紀後半の築造と推定されている。その石室は、王塚の2号石室と同じように、板石を混用した河原石積みであった。ただし、土保山古墳の場合は、上部の数段を河原石積みにし、下の2段に板石を積んだ特殊なもので、最下段の1枚を縦に使用し、2段目の板石を横に用いるという横穴式石室の壁面構築法を採りいれていた。

金属製刀装具は6、7世紀代に多く製作されたが、鹿角製刀装具の年代はややさかのぼるのが普通である。直線と弧線とが複雑に組み合わされた構図を直弧文とよぶ。浜田耕作博士の命名[注2]である。滋賀県水尾村鴨古墳から出土した直弧文鹿角製刀装具の図柄は、大胆な手法を欠き、便化されて平面的になっている。王塚出土の装具に彫られた文様に比べ、より新しい時期のものといえよう。鴨古墳の築造年代は、6世紀初頭に位置づけられている。福井県吉野石船山古墳の豊富な出土例のなかに、文様・形態が王塚出土の鹿角製装具に酷似した遺品[注3]（東京国立博物館所蔵）がある。鉄剣の出土は、前・中期の古墳に多く、後期にはまれである。

5世紀以後、小形で粗悪な倣製鏡が製作された。大阪府カトンボ山古墳や和歌山県大谷古墳[注4]で見られたように、素文鏡が一般化したのは、5世紀中葉以降のことであろう。

淡緑色で質の柔かい碧玉が装身具に使われたのは、4世紀後半から5世紀にかけての期間であった。出土した管玉の材質や形態は、王塚が中期を下るものでないことを示している。

片関片刃矢式の鉄鏃[注5]も、中期の遺物とされているものである。

大刀や刀は、5世紀にはいると、無区から片区すなわち刃区だけの幅広い内反り茎となり、中葉ごろから浅い斜めの棟区が発生する[注6]。1号石室に副葬された大刀は、棟区の存在が判然しない。あってもきわめて浅く、めだたぬ程度のものであったかと思われる。

以上の概観から、王塚の築造年代は、古墳時代中期の後半、つまり5世紀の後半に一点をおくものであろうと推定される。現時点での知見によれば、王塚は、飛鳥地方における最も早い時期の古墳である。

冬頭には王塚のほか古墳の片影も見られなくなっているが、かっては王塚の北方ならびに西方に近接して東田1号墳・同2号墳・上ゲ見1号墳・同2号墳・流レ田1号墳・同2号墳・中

里1号墳・同2号墳・門脇古墳・ハゲノ下1号墳・同2号墳・同3号墳等10基を越える円墳が散在し、宮川と川上川とにはさまれた、合流点近くの狭い沖積地に古墳群を形成していた。

王塚の西方山下にあった大洞塚（ハゲノ下1号墳）は、明和7年（1769）に掘りくずされた。明治初年に編述された『斐太後風土記』に、国学者田中大秀が寛政5年（1793）にしるした、大要次のような文章とツチブエの図とを載せている。

明和7年正月、冬頭東等寺の鐘楼を建立した際、大洞塚の石室を掘りくずしたら、金の輪（金輪）、大平（杯）、油燈台（高杯）、花入れ（壺の類）、ツチブエ（瑟）破片等が出土した。3月さらに残欠が見つかって、ツチブエを完全に復元することができた。

図示されたツチブエ（須恵器）は、7世紀末ごろの製作と推定される。大洞塚が後期古墳であったことは確実である。

B　被葬者の階層と相互関係

古墳時代中期の木棺には、割り竹式と組み合わせ式の両型式が知られている。王塚では、1号石室でも、2号石室でも木棺の残片らしいものは、全然認められなかった。従って木棺の型式がどのようなものであったかはわからないが、遺体は最初木棺内に安置されていたものと推測される。鉄鏃、鉄鉾は棺外の副葬品であろう。

1号石室の遺体は北を枕に、2号石室の遺体は南を枕に葬られていた。二人の遺体はおそらく同時に埋葬されたのであろう。同時といっても、2号石室のほうが先に封じられたことは、前述したとおりである。

1号石室からは27本の歯が発見されたが、田口忠夫歯科医師の鑑定によれば、17歳から20歳までの若年層のものである。2号石室からは歯は1本も発見されなかった。

1号石室から頭蓋骨・大腿骨部の人骨片、2号石室からは頭蓋骨・左右大腿骨・左距骨等の人骨片が採集されたが、須田圭三医学博士は、前者の崩壊度が高いことから、1号石室の被葬者が大腿骨成長停止前の18、9歳前の若年者であること、また2号石室の被葬者は、大腿骨の長さ・骨質から、成人以上老年期に及ぶものであることを明らかにされた。医学的に性別を判定できる資料は得られなかったが、両石室の被葬者は、ともに男性であったかと推測される。

鹿角を用いた刀剣外装法は、古い伝統を継承する純日本的なものであった。鹿角は自然の形をほとんどそのままに刀柄として使うことができ、握りぐあいも非常によい。ただし、実用の際には離脱しやすく、防禦的に大きな期待を寄せることはできない。直弧文が帯状のものを不規則に巻きつけ、組み合わせた形から起こった装飾文様であろうと説かれたのは、浜田耕作博士であった。(注8) モチーフの起源や文様の意味についてはいろいろ説があるようであるが、直弧文は単なる装飾ではなく、文様自身に呪術的な意味をふくむ、神秘的な符牒であったと考えられる。2号石室に副葬された直弧文鹿角装鉄剣は、特殊な呪力を有する宝器として大和朝廷から授与された下賜品であろう。このような副葬品は、被葬者が大和政権に服属を誓い、飛騨全土とまではいかなくても、少なくも高山盆地を支配した地方の有力者（その素性が外来の征服者

であったか、土着の首長であったかはつまびらかでないが）であったことを立証する。

両面宿儺という、両面四手四足の、多分に伝説化された人物が反乱を起こして討伐されたことが仁徳紀に記載されている。正史にしるされた、飛騨に関する記事の初見であるが、飛騨はこのころから大和朝廷の勢力下に参加したのであろう。王塚は、それから半世紀あまりを経過したころに築造された。

1号石室の被葬者は2号石室の被葬者と同族関係にあった卑属の若者であろうと想像されるが、もちろん詳しいことはわからない。

なお、王塚に対して、従来天皇の御陵であるとか、都のお姫様を葬った塚であるとか伝えられてきた。

安政5年（1858）に没した桐山力所の遺著『飛騨遺乗合府』は、オオヅカに「王墳」の文字を宛て、

> 在于大野郡灘郷冬頭村。土人云。帝陵なりと。往々祟を得る人あり。掘ば朱出づと。或天文学者の云、常に紫気起つと。恐らくは帝陵ならん。土人口碑不可謬。或人云、後柏原天皇の陵也と。

と解説し、また前掲書『斐太後風記』の著者富田礼彦は、

> 冬頭村ノ中央平田中ニ一堆ノ古塚アリ。何ノ塚カ不詳。或曰、此塚遠望雲気起、後柏原天皇之御陵ナルベシ、トイヘルハ不審。是ハ国司姉小路基綱卿の息女済子、文亀ノ頃典侍ニ任ジ入内シ玉ヘリ。其故附会セシナラン。

と述べている。これらの記述が逆に口碑の信頼度を高めたり、あるいはさらに誤伝を生じさせたりもしたのであろう。とにもかくにもそうした口碑が、今日まで王塚を全面的な破壊からまもりつづけてきたともいえそうである。

1号石室で直刀上にあった長管骨（獣骨？）の究明は、今後の調査にゆだねたい。

結語の執筆にあたり、名古屋大学助教授楢崎彰一先生から資料のご貸与や種々のご教示を賜わった。記して深甚の謝意を表する。

（大野政雄）

注

1　陳顕明『土保山古墳発掘調査概報』高槻叢書第14集、昭和35年
2　浜田耕作・梅原末治『肥後に於ける装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文学部考古学研究報告第1冊、大正6年
3　浜田耕作・梅原末治『近江国高島郡水尾村の古墳』京都帝国大学文学部考古学研究報告第8冊、大正12年
4　注3に同じ
5　森浩一・石部正志「畿内およびその周辺」日本の考古学Ⅳ、昭和41年
6　後藤守一「上古時代鉄鏃の年代研究」人類学雑誌第54巻第4号、昭和14年
7　石井昌国「出土刀」新版考古学講座7、昭和45年
8　注2に同じ

附編Ⅰ　王塚古墳の歯牙に就いて

歯科医師　　田口忠夫

成人の歯牙の総数は、32歯（智歯を含む）であるが、発掘された歯牙の数は27歯で、僅かに上顎右側の犬歯と第１、第２小臼歯、それに下顎では右側中切歯と左側第一大臼歯の５歯が欠如しているのみで、右側は上下顎に於いて１歯のみ欠如で殆ど揃っており、歯列及咬合状態がはっきりと推定され得る。

発掘された歯牙

	上		
右	8 7 6 △ △ △ 2 1	1 2 3 4 5 6 7 8	左
	8 7 6 5 4 3 2 △	1 2 3 4 5 △ 7 8	
	下		

△印は欠如している歯牙

永久歯が萌出し、その形成を完了する時期が15才頃から18才頃であるから、智歯がその形成を完了している状態より、この年令以上である事は間違いない。

縄文時代にたまたま見られたような、成人式に関係あると思われる、生前に幾本かの前歯を抜歯したり、宗教的な風習の歯冠の一部を叉状に研磨するなどの歯牙変形も見られない。明らかに古墳中期の人であることは他の発掘された資料と共に証明される。

1500年以上と言う歳月の為、人骨は数片のみしかその形態を留めては居ないが、歯牙は人体の内では一番硬度の為、長年の風化に耐えたのである。特に歯冠は非常に硬い琺瑯質で被われて居る為殆どその形態を留めて居る。歯根は白亜質で被われているけれど、残って居るものは５歯であり非常に脆くなって居る。

大臼歯特に智歯が歯冠部のみ残り、象牙質も無くなり、琺瑯質のみが特に残り、鋳造冠の如き歯冠を残して居るのは組織学的のみならず、補綴学的にも非常に参考になる形態をとどめて居る。

歯牙を発掘した土砂の中には、頭蓋骨の小骨片が混り、その中よりピンセットにて「朱」の附着せる骨片を多数発見した。数歯の裂溝にも朱がつまって居たが、朱に依る歯牙の着色は認められなかった。殆どの歯牙は茶褐色を呈し、歯冠は脱灰されかかった乳白色を呈して居る。

永久歯の大きさに就いては別表の如くである。前歯は普通下顎犬歯は大きく尖鋭であるが、小臼歯は上下顎共標準より小さい。大臼歯は下顎は大きくて上顎は小さい。

形態は咬頭が高く、裂溝が深く、隅角接点にも咬磨又は化学的な磨耗も認められない。髄室、髄管共に大きく、歯根端の形成状態よりして17才から20才位と思われる。

男性の様にも思われるが性別はつけ難い。齲歯の罹患は全然認められず、かって私が蒙古の奥地で見た青年達の歯牙によく似ている。

歯牙の長径と歯冠の幅径（mm）

長　径							14.00	14.00						20.80		
頬舌径	10.75	10.50	11.40									8.60	9.15	11.15	10.95	10.20
近遠心径	7.80	8.70	9.80				6.73	8.50	8.50	6.70	7.65	6.80	6.70	11.30	9.55	7.75
上　顎	8	7	6	△	△	△	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
下　顎	8	7	6	5	4	3	2	△	1	2	3	4	5	△	7	8
近遠心径	10.75	11.05	12.30	7.10	6.10	6.80	6.10		5.50	5.75	7.15	6.80	7.60		10.60	11.50
頬舌径	10.10	10.50	11.30	8.30	7.10							7.20	8.55		10.15	10.10
長　径				17.30	18.00											

附編II　王塚古墳の骨に関する報告

医師　　須田圭三

第1　2号石室より発見された人骨

2号石室より発見された人骨は次の9個である。

1　左大腿骨

1) 形態

近位端に於て骨頭、大転子、小転子、転子間稜部、遠位端に於て内髁、外髁、腸平面下部、髁間窩が崩壊しているが、骨体は殆んど無傷で、今回発見された人骨中最も完全に近い原型を保っている。

上記崩壊部では海綿質が露出し、腸平面下部、髁間窩は崩壊が高度で骨髄腔まで犯され、深く陥凹した状態を呈している。骨体前面略正中線上に於て、近位端、遠位端に近く長さ約120粍及び90粍の2条の亀裂が上下に走っている。

2) 色調

色調は主としてコーク・ブラウン（cork brown）・乃至オリエント・ブラウン（orient brown）である。骨表面は泥土に汚されている。

3) 計測値

計測値は次の通り

大腿骨頭起始部	A点より	360粍
髁間窩中央	B点まで	
大腿骨頭部	C点より	53粍
大転子部	D点まで	
内髁部	E点より	30粍
外髁部	F点まで	

骨体中央部G点周径　80粍、直径　25粍

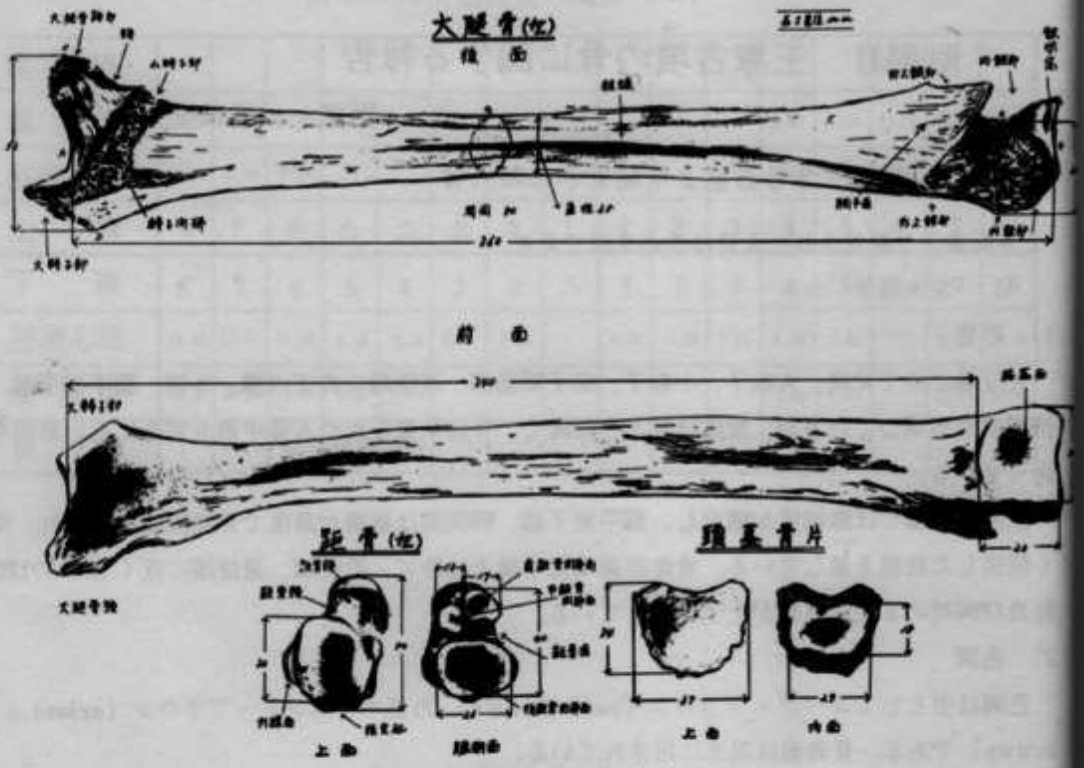
2　右大腿骨

1) 形態

近位端の大略⅓、遠位端外髁並に内髁が崩壊している。尚、骨体は前面に於て緻密質表層が遠位端大略48粍を除き剥離している。又外上髁部にも小崩壊部を見る。

2) 色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウンであるが、腸平部はオーリック・ブラウン（auric brown）を呈す。



第1図　2号石室発見人骨（1）

3）計測値

近位端	A点より	245粍
遠位端髁間窩	B点まで	
外髁部	C点より	50粍
内髁部	D点まで	
膝蓋面横径	H点より	30粍
	I点まで	
髁間窩部横径	E点より	16粍
	F点まで	

骨体G点に於ける周径　80粍、直径　25粍

4）その他

(1) 骨体後面近位端に近く1個の20×30粍大、2個の10×10粍大、並に数個の、扁豆大より黍粒大の白かびの集落を見る。

(2) 骨体後面には他に粟粒大より扁豆大の多数の黒変部を散発的並に集団的に見る。

3　左距骨

1) 形態

肥厚した短骨で略完全に原型を保ち、緻密質の一部表面が僅かに崩壊しているにすぎない。距骨頭、距骨体、距骨頸部等解剖学的に明瞭に判別される。

2) 色調

主としてコーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウンである。距骨頭、頸部に小斑点状の黒変部を見る。

3) 計測値

長径　50粍、短径　26粍

前距骨関節面長径　17粍、中距骨関節面長径　13粍、後距骨関節面長径　26粍

4. 頭蓋骨片

1) 形態

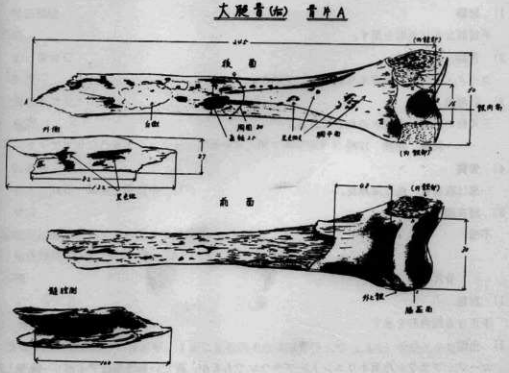
扁平なる不正半円形を呈す。

2) 色調

オリエント・ブラウンを主調とし、上面には多数の小黒変斑点を見る。

3) 計測値

長径　37粍、短径　34粍



第2図　2号石室発見人骨（2）

4) 骨質

上面並に内面は緻密質より成るが、内面に於て断端は海綿質を露呈している。

5) 局在部位

頭蓋骨の一部であるが、その詳細な局在部位は不明である。

5. 骨片A

1) 形態

長管骨の一部と見られる。長方形にて2面よりなる。

2) 色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウンよりなる。

3) 計測値

長さ 132粍、横巾 27粍

4) 骨質

主として緻密質で、海綿体は崩壊している。

5) 局在部位その他

右大腿骨体の近位端後面、側面の一部の破片と考えられる。所々に大なる黒色斑を見る。

6. 骨片B

1) 形態

不規則なる三角形を呈す。

2) 色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウン。

3) 計測値

三角形の三辺は大略次の長さである。

30粍 38粍 17粍

4) 骨質

一部は緻密質、他は海綿質。

5) 局在部位

不明

7. 骨片C

1) 形態

不正なる四角形を呈す

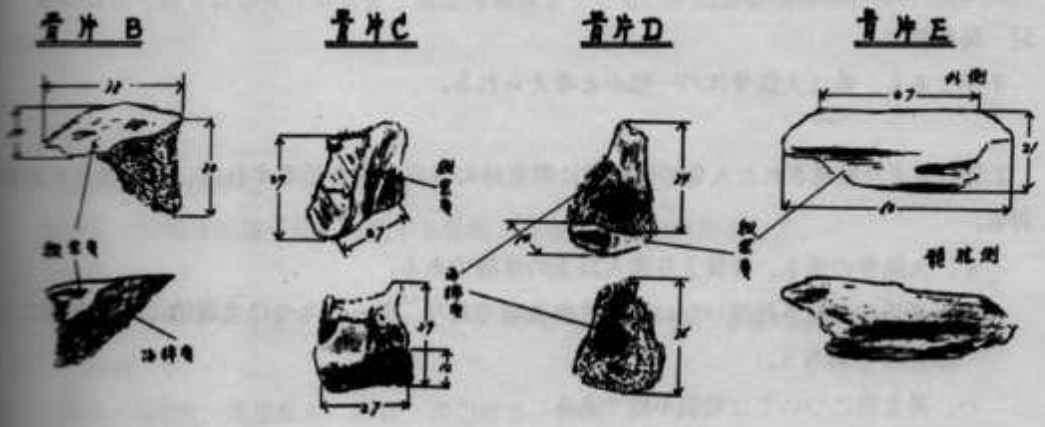
2) 色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウンであるが、新しい崩壊部はアイボリーを呈し所

々に黒変班を見る。

3) 計測値

四角形の1辺　27粍、　厚さ　12粍



第3図　2号石室発見人骨（3）

4) 骨質

一部は緻密質、他は海綿質よりなる。

5) 局在部位

不明

8　骨片D

1) 形態

三角形を呈す。

2) 色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウン。所々黒変班を見る。

3) 計測値

長さ　34粍－36粍、底辺巾　14粍

4) 骨質

緻密質は極く一部で、大部分は海綿質。

5) 局在部位

不明

9　骨片E

1) 形態

長管骨の一部と目され長方形。1面に比較的大なる（直径大略 1.5粍）栄養孔を見る。

2) 色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウン。

3) 計測値

長径　60粍、　巾　21粍

4) 骨質

主として緻密質よりなる。

5) 局在部位

不明なるも、或は大腿骨体の一部かと考えられる。

2号石室より発見された人骨の形態並に開室時の状況を綜合勘案すれば、次の諸点を推測し得る。

イ、大腿骨の長さ、骨質より成人以上の体格である。

ロ、歯牙が発見されていない事より無歯顎であり、従って年令は常識的には老年期に入ったものであろう。

ハ、男女別については判別不能である。

第2　1号石室より発見された骨

1号石室より発見された骨は、6個の人骨と1個の人骨に非ざると思われる骨で、計7個である。

1　骨片a

1) 形態並に局在部位

大腿部遠位端髁間窩部を形成する部分と目される立方体形である。

2) 色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウン。

3) 計測値

長径　45粍－55粍、短径　24粍－28粍、厚さ　23粍－25粍

4) 骨質

髁間窩と目される部は緻密質、他は海線質より成る。1面は骨端線を形成した面と考えられる。

2　骨片b

1) 形態並に局在部位

大腿骨遠位端髁間窩部の一部と目される立方体形。

2) 色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウン。

3) 計測値

長径　34粍、短径　27粍、厚さ　30粍

4) 骨質

髁間窩部と目される部は緻密質、他は海綿質よりなる。一面は骨端線を形成した面と考えられる。

3　骨片 c

1) 形態並に局在部位

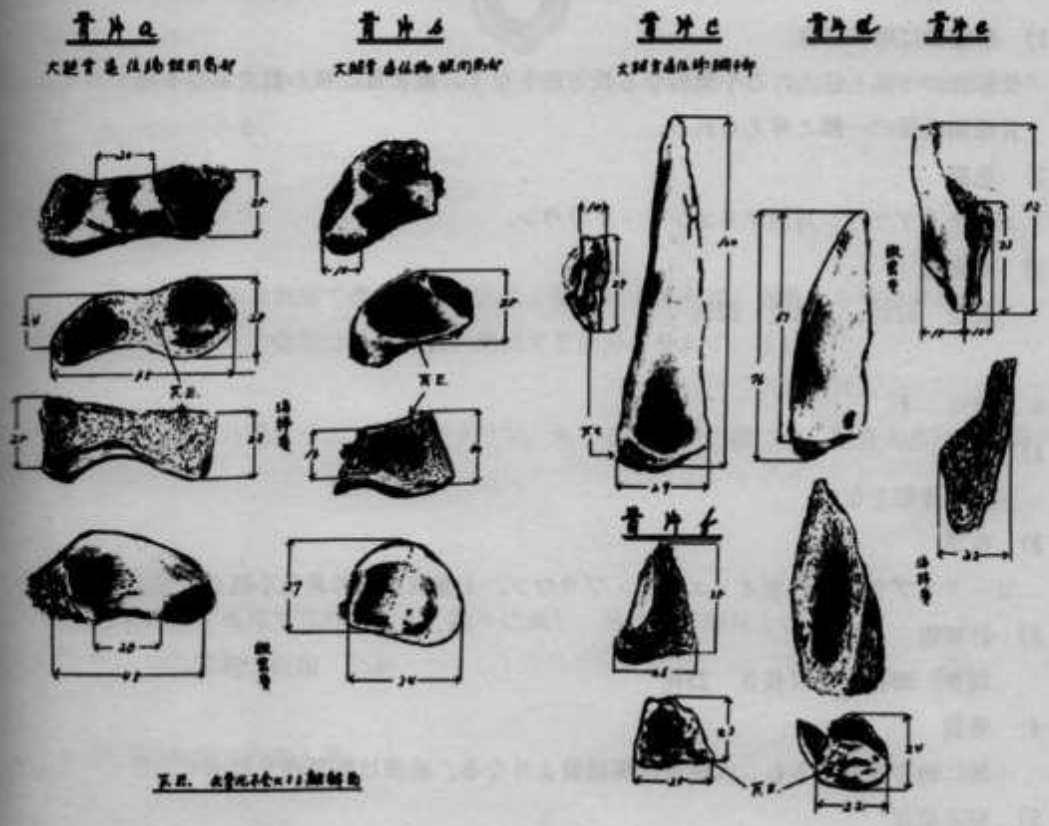
大腿骨遠位端後面腦平部を形成する骨部と目され、長三角形を呈す。

2) 色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウン。緻密質一部に多数の小黒色斑点を見る。

3) 計測値

長さ　100粍、底辺長さ　29粍、底辺厚さ　10粍



第4図　1号石室発見人骨

4) 骨質

腦平部と目される面は緻密質、他は海綿質より成る。底辺を成す面は骨端線を形成した面と

考えられる。

4　骨片　d

1）形態並に局在部位

大腿骨後面腸平部と考えられる。底辺を成す面は、骨端線を形成した面と考えられる。長管骨の一部と目される長三角錐体をなす。

2）色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウン。緻密質の所々に多数の小黒色斑点を見る。

3）計測値

長径　67－76粍、底辺の一辺　22粍－24粍

4）骨質

1面は緻密質、他は主として海綿質よりなる。底面は骨端線を形成した面と考えられる。

5　骨片　e

1）形態並に局在部位

長管骨の一部と目される不規則なる長方形をなす。緻密質に被われた部は2面を有す。大腿骨後面体部の一部と考えられる。

2）色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウン。

3）計測値

長径　52粍、　短径　22粍

6　骨片　f

1）形態

三角錐体形をなす。

2）色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウン。1面に1個の黒色小斑点を見る。

3）計測値

高さ　39粍、底辺長さ　25粍

4）骨質

一部に緻密質を見るも、大部分は海綿質よりなる。底面は骨端線を形成せる面と考えられる。

5）局在部位

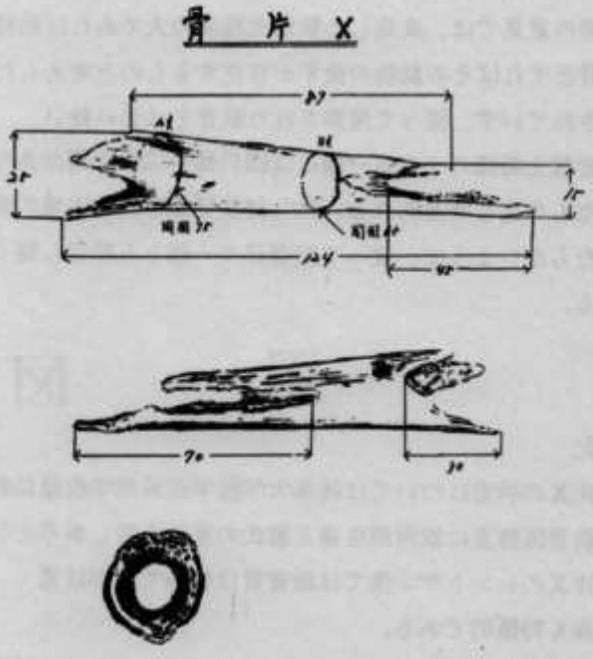
不明

1号石室より発見された骨を綜合勘案すれば

イ、2号石室より発見された骨に比し崩壊度が高度であり、従って2号石室のそれより骨質が脆弱であったものと想像される。

ロ、骨片a、b、c、d、fは何れも大腿骨遠位端にて、骨端線を成す面にて骨体と骨端部と離解したものと考えられる所から、大腿骨成長の停止前即ち年令的には18～9才前と推定される。

ハ、骨片a、b、より大腿骨の発育は良好である。



第5図　1号石室発見骨片

7.　骨片　X

1)　形態

長管骨であるが周径は両端で著しく差があり、徐々に太さを減じ顕著なる特徴を有する。一端は三つの尖端を作り、他端は二つの長い溝にて2部分に分れている。

2)　色調

コーク・ブラウン乃至オリエント・ブラウン。大なる周径の一端に近く扁豆大並に栗粒大の黒色斑点を見る。

3)　計測値

長さ　124粍

周径　図に於てA点で75粍なるも、徐々に減じ、B点では65粍となる。

直径　一端は25粍、他端　15粍

4)　骨質

骨質は極めて緻密で打音も高い。

5)　考案

人骨にはかかる特徴ある形態の長管骨は存在せず、従って人骨とは考えられない。

普通人骨はたとえ長管骨でも筋肉等が附着しその収縮作用により牽引力が加わり骨稜等を形成しているものであるが、本骨片は、かかる骨稜等を見出さない。若し人骨とすれば極めて奇

型的のものであろう。

獣医師の意見では、成長した秋田大程度の犬であれば斯様な骨も存在するとのことであるが若し獣骨とすればその動物の歯牙が存在するものと考えられる。然し獣の歯牙と見るべきものは発見されていず、従って埋葬された獣骨とは云い難い。

その形態上周径の小なる一端には図の如く二つの溝があり、或は極く簡易な人為的操作が加えられたものとも考えられる。然し従前発掘された古墳の副葬品には斯様な形態を有するものは見あたらないようで、従って副葬品の一種とも断定し難く、この骨の存在については全く不明である。

付　記

1　骨片Xの判定については岐阜大学医学部解剖学教室助教授磯野日出夫氏、高山赤十字病院外科勤務医師並に獣医師佐藤正敏氏の意見を徴し参考とした。

2　骨片Xのレントゲン像では緻密質は極めて陰影は濃く、他骨片に比し石灰化が高度であり、この点も特徴的である。

3　骨片Xの人骨或は獣骨等の鑑別は組織標本を製作し顕微鏡的検索を行うか、或は血清学的の検索により判定が可能であると考える。

図　　版

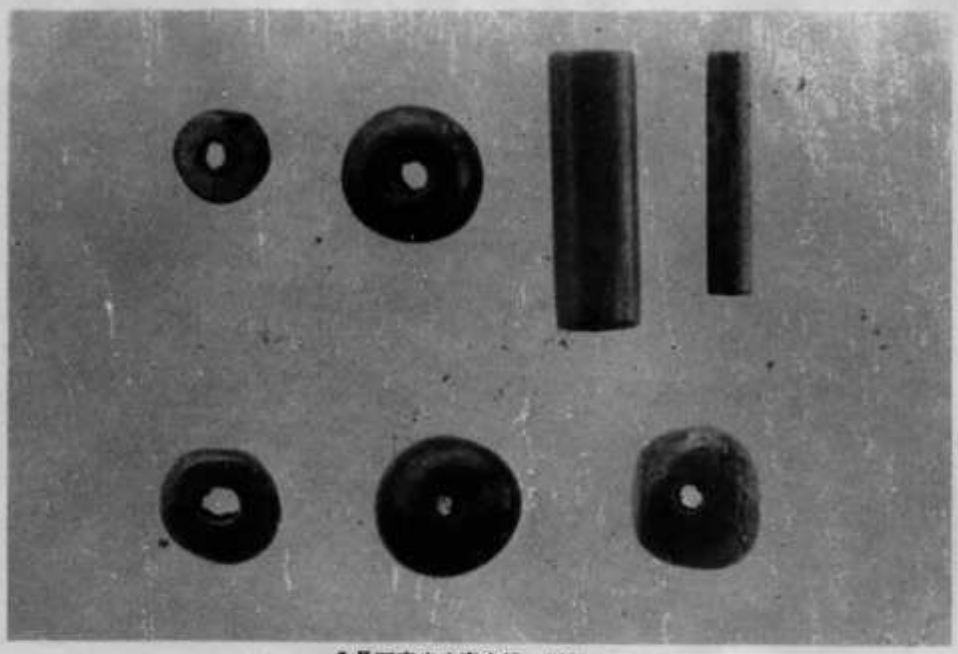
図版　第1

王塚古墳全景

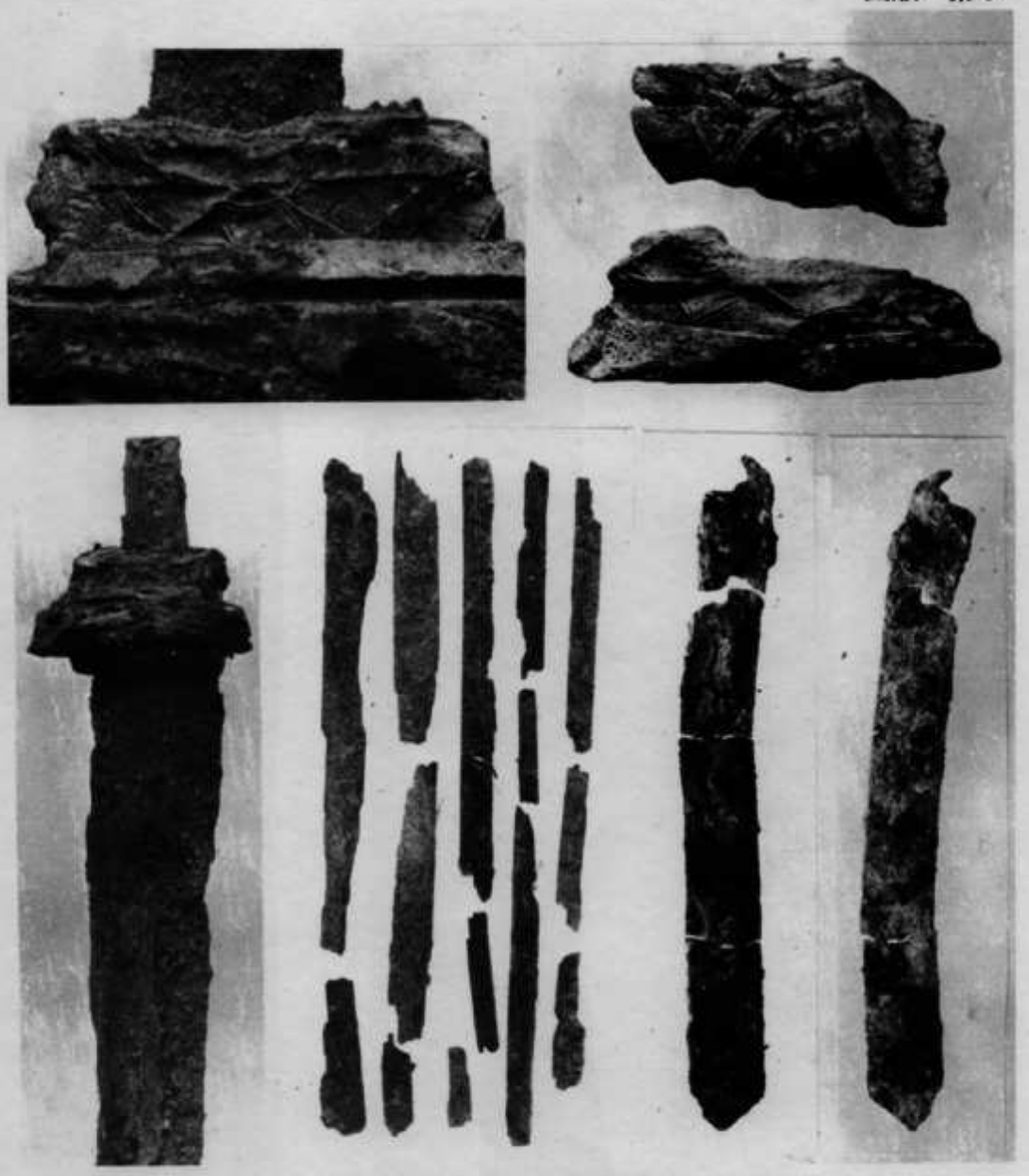
石室全景

2号石室遺物出土状態

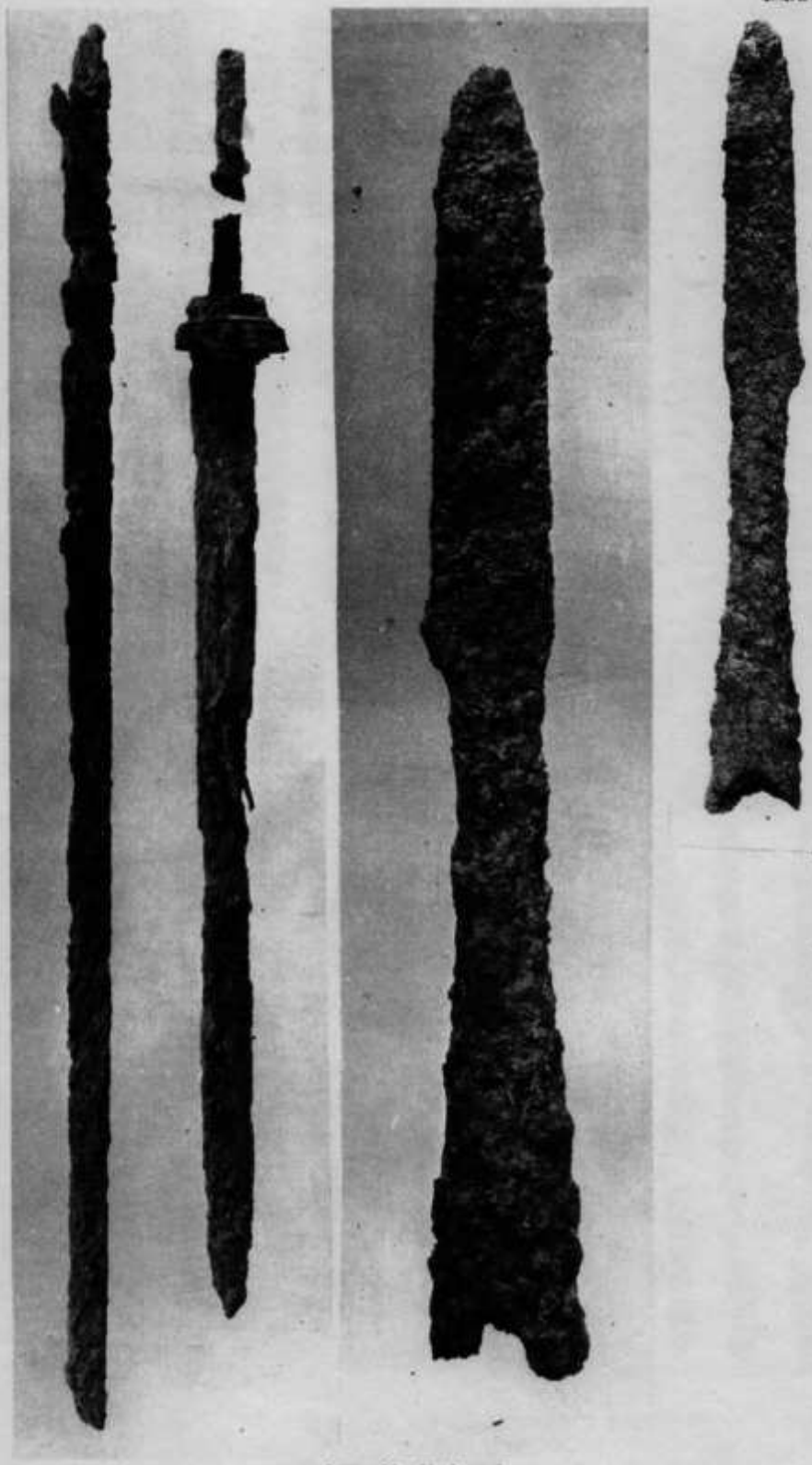
1号石室遺物出土状態



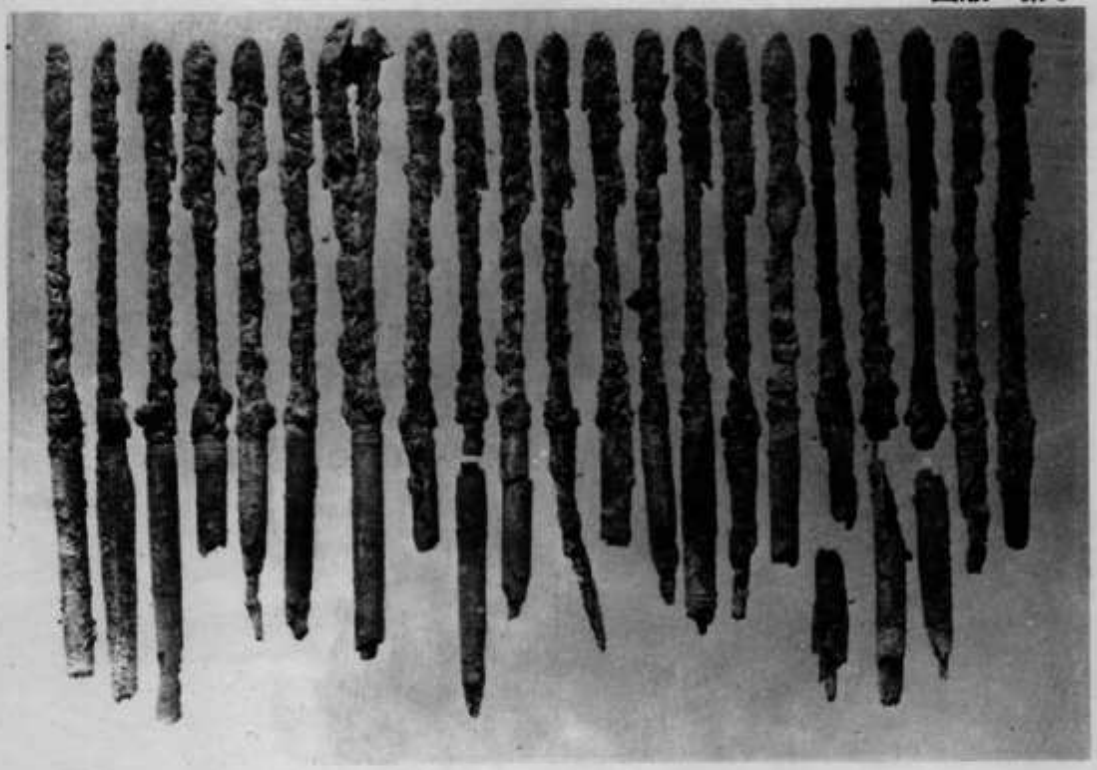
2号石室出土素文鏡・玉類

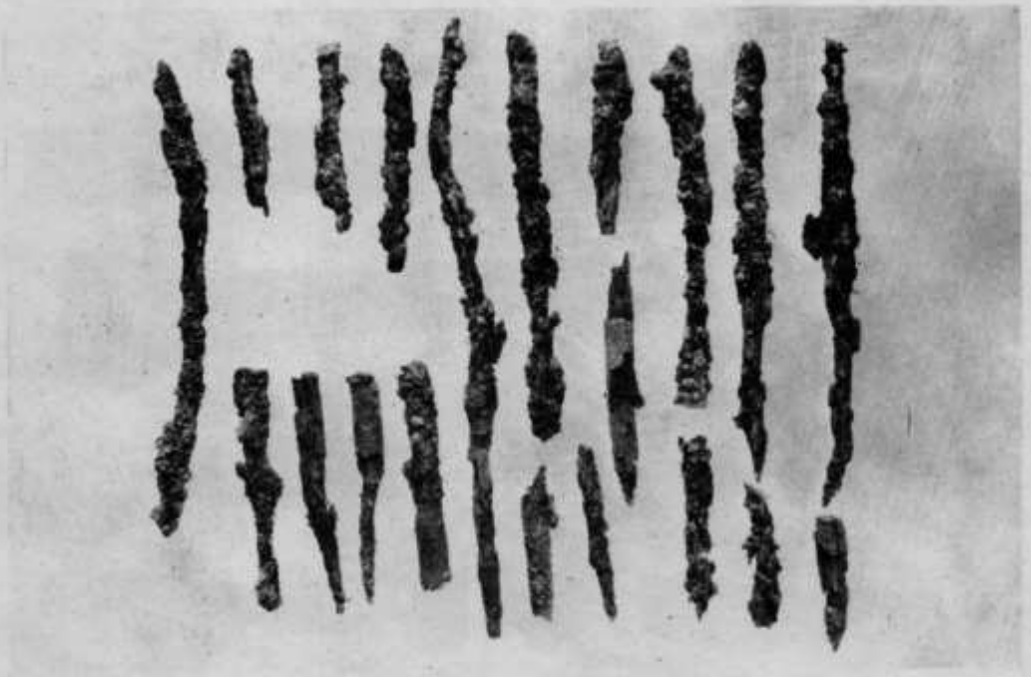


2号石室出土鞍細部・同鞘遺存部、1号石室出土鉄製金具

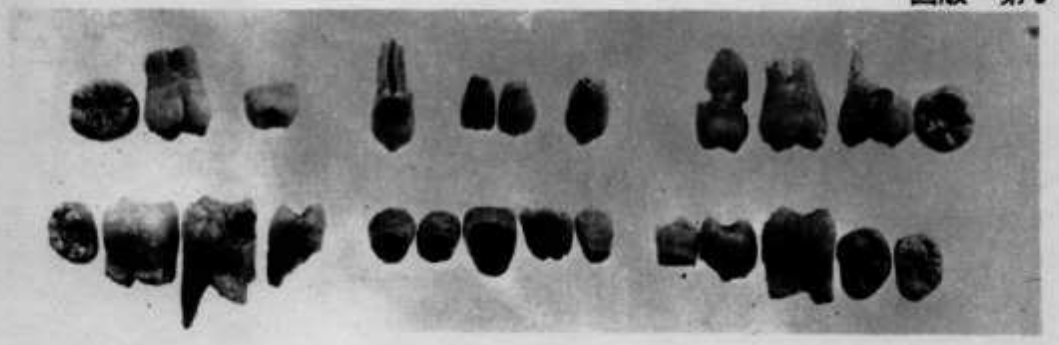


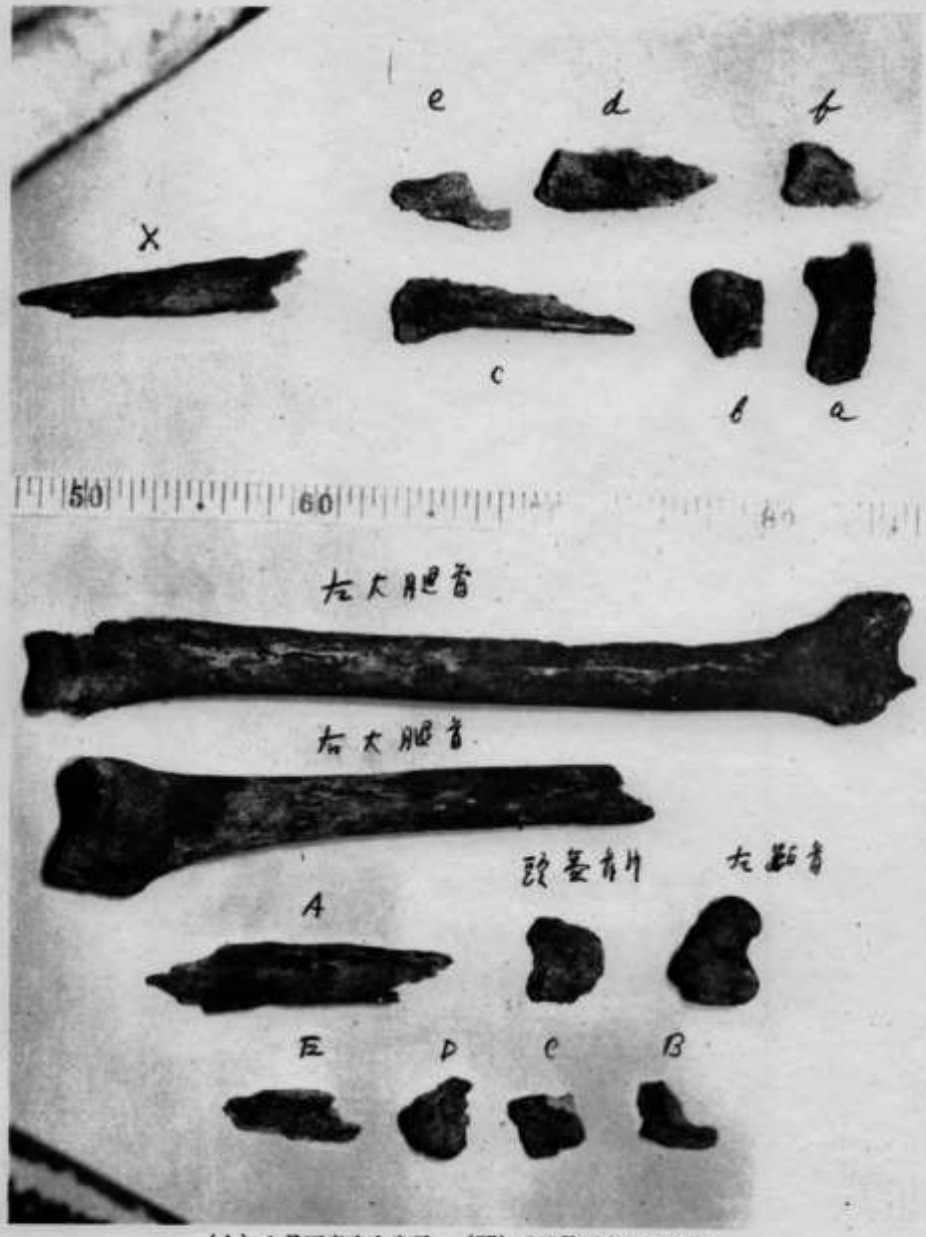
直刀・鏃・鉾（両面）





鉄鏃（上）2号石室出土（下）1号石室出土





（上）1号石室出土歯牙　（下）2·1号石室出土人骨

冬頭王塚発掘調査報告

昭和46年3月発行

編集・発行　高山市教育委員会

印　　刷　斐太中央印刷株式会社

岐阜県高山市下三之町14番地